

縄文時代前期の遺跡―^{いる き ばし い せき}居木橋遺跡―

居木橋遺跡の概要

居木橋遺跡は品川区大崎二丁目付近に存在し、今から約5,000年前、縄文時代前期にあたる貝塚群を中心とした、縄文時代早期から近世、近代までの遺物や遺構(注1)がみられる複合遺跡です。この遺跡は、武蔵野台地の東南、目黒台と呼ばれる台地の先端部で、目黒川に向かってゆるやかに傾斜する標高15mから20mの舌状台地の上に位置しています。

遺跡名は旧地名が居木橋村(明治22年<1889>、居木橋村付近の5カ村が合併して大崎村となる。)と呼ばれていたところで、その名は目黒川に架かる居木橋や居木神社として残っていることから居木橋遺跡と名付けられました。従来は居木橋貝塚とされてきましたが、貝塚以外の遺構・遺物も存在していることから変更されました。

貝塚からのメッセージ

貝塚は、縄文時代の人々が捕って食べた貝の殻が積み重なってできたものですが、その中には鳥や獣^{けもの}のほかに爬虫類^{はちゆうるい}(ウミガメなど)、魚類の骨や歯もまじって出土します。

貝塚の構成する貝の種類は、貝塚の時代や場所によってちがいますが、淡水産(川や湖沼)、海産に陸産のものもあります。

居木橋遺跡の貝塚からは、縄文土器や破片のほか石器として打製石斧・磨製石斧・石鏃^{せきぞく}(やじり)・軽石製浮子^{うき}・石製装飾品、獣骨としてニホンジカ・イノシシなど、貝類はアカニシ・バイガイ・サルボウガイ・ハイガイ・マガキ・ハマグリ・マテガイ・カガミガイ・ヒダリマキマイマイ(陸産)などが出土しています。この中でとくに多いのはハマグリとハイガイです。とくにハイガイは現在九州より南の海でしか採集できないので、この時代は現在よりも温かかったことが想定できます。



居木橋遺跡出土の縄文土器



縄文土器出土のようす

このように貝塚から出土する貝の種類や動植物は、その採取する技術や地域の環境を物語るものとして重要であり、海岸線の位置など地形変化の様子もわかり、出土する土器や石器・骨角器とともに縄文人の文化を探る貴重な資料となっています。

(注1) 遺構とは、地面(地中)に残された昔の人々の生活のあと

縄文時代について

縄文土器を使用していた時代を、縄文文化の時代または縄文時代と呼んでいます。その時期は、土器が初めて作られたときから弥生文化へ移り変わるまで、今からおおよそ1万2千年前から2千2百年前ごろまでをいいます。

縄文時代とか縄文文化の名称は、主に土器の外側に、よったひもを回転させながら押しつけた縄目の文様をつけた土器が多いので、この名称が生まれました。

縄文土器という名称は、1877 (明治10) 年、E・S・モースが品川区から大田区にかかる「大森貝塚」を発掘調査をし、1879年に刊行した『Shell Mounds of Omori (大森の貝塚)』のなかで[Cord marked pottery コードマークドポタリー]という表現をされたのが最初です。これを1886年、白井光太郎が初めて「縄紋土器」の訳語を使用したのが名称のはじまりです。

縄文時代は、土器の形の研究から概ね次の6つの時期に分けられています。

- 早創期 (B. C. 11,000年から7,500年)
- 早期 (B. C. 7,500年から4,000年)
- 前期 (B. C. 4,000年から3,000年)
- 中期 (B. C. 3,000年から2,000年)
- 後期 (B. C. 2,000年から1,000年)
- 晩期 (B. C. 1,000年から 300年)

土器の作り方は、粘土を輪積みにして作っていました。はじめの頃 (縄文時代早期) の土器は、形は底が細いとんがり底で、口の広い土器



居木橋遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 太線の部分が遺跡

でしたが、地域や時期によって形もいろいろな土器が作られるようになっていきました。文様も縄文のほかに、竹や貝で文様を描いたり、線を引くなどして表現している土器もあります。縄文土器が最も多く発見される場所は貝塚の中で、貝殻といっしょにこわれた土器が捨てられたのでしょうか。



発掘風景 (1993年2月)